第19回
コロナ禍における ケアマネの存在意義

在宅医だから伝えたい！

長尾和宏の 在宅介護を快適にする極意

㊙ここだけの話

執筆▶長尾和宏
医学博士。長尾クリニック院長。公益財団法人 日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授。日本慢性期医療協会理事他。ベストセラー『「平穏死」10の条件』など著書多数。

ケアマネはテレワークで済む仕事ではない

コロナ禍において、国はテレワークを推奨しました。しかし医療や在宅医療においてはどうでしょうか。医師や看護師や介護職などにおいては、テレワークはあり得ません。他のエッセンシャルワーカーと同様に、自宅でパソコンに向かうだけで済む仕事ではありません。では、果たしてケアマネジメントはどうでしょうか。

そもそも、ケアマネジャーが担当の利用者さん宅を訪問している時間と、デスクワークをしている時間の比率は、コロナ禍以前はどうなっていたのしょうか？　ケアマネによってはデスクワークの時間の方が圧倒的に多かったという人もいるかもしれず、もしもそうだとすれば、パンデミック時には「すべてテレワークで済む」という考えが成立することもあるでしょう。約20職種に及ぶ医療・介護にかかわる多職種の中で、完全テレワークで成り立つ職種はケアマネだけかもしれません。「他の職種の方はご苦労さまね、でもワタシはケアマネだから家から一歩も外に出なくても仕事ができるのよ！」と考えている人は、近い将来、人工知能（AI）に取って代わられて仕事を失うかもしれないのです。アナタの存在意義や、プロの矜持がいつしか消えてしまうことを僕は危惧しています。

感染を恐れる気持ちは、三密を避けられない医療者とて同じです。介護職員も同じでしょう。しかし、どの職種もこの1年半以上、さまざまな工夫をして、なんとか現場を乗り切ってきました。それなのに、緊急事態宣言が明けても訪問を控えて、「すべてオンラインで」と提案してくるケアマネに対しては、正直、「職業プライドがないのかな？」と首を傾げてしまいます。利用者さん側から訪問を断られる場合は仕方がないでしょうが、「完全テレワーク」はある意味、「踏み絵」なのかもしれません。今後も繰り返されるであろうパンデミック時におけるケアマネジメントの意義について、第5波が鎮静化した今、多職種と共に振り返るべきだと思います。

ケアマネは自宅療養者の生活を守る司令塔

第3、4、5波において、首都圏や関西圏では大量の自宅療養者が生まれました。医療崩壊で入院できない人だけでなく、入院が可能な状況でも、認知症の周辺症状のために付き添い無しの入院ができないという人は、自宅療養を強いられました。僕は、特に第4波と第5波において、高齢の独居の方や独居で認知症のある方の自宅療養を“24時間管理”しました。

感染者が多すぎて、「自宅療養ではなく自宅放置だ！」と報道されましたが、確かに、医療がまったく提供さ